

第一章 盲目の神使（一九）

自分は、ある清い水の流れている河の中へはいつて漁魚をしていた。そうすると河の岸に立って、しきりに呼ぶ者がある。その男の顔を見ると、眼がほとんど閉がって、一ツも見えない。ようこんな眼で危い河縁の土堤へこられたものだと思った。

ともかくも河から上って、その使の側へ寄って、

『私を呼びとどめたのは何の用か』

とたずねてみた。すると盲目の男は、

『私は地の高天原からのお使で、あなたをお迎いに参ったものです』

と答えた。そこで自分は、

『いや、先だつて、神界を探険したが、あのような状態では、地の高天原も糞もあつたものではない。むしろ地獄の探険が優しである』

と答えた。そして、

『お前のような盲目の使を導くすような神なら、きつと盲目の神である。盲目が眼明きの手をひいて、地獄の谷底へ落すようなものであるから行かぬ』

と答えた。すると其の使は、

河縁の土堤……ここでは現界的には京都府下園部の大橋の上手のところ。

盲目の男……開祖の命を受けて聖師さまを迎えに行った四方平蔵氏のひと。

『あなたは私の肉体を見ているのか、それとも霊を見ているのか。肉体は現存しているが、私の霊は尊いものである。しかも私の霊はすべての神に優れている』

と誇り氣にいう。にわかにも自分も行きたい氣がして、産土神にむかつてお願いをした。すると産土神が現われて、両眼に涙をたたえたまい、

『とも角も世界を救済する御用であるから、行ってくるが宜かろう。しかし今度行ったら、容易に帰ってくることはできぬ。いろいろの艱難辛苦を嘗めなければならぬが、神から充分保護をするから、使について高天原へ上ってくれ。自分も産土神として名誉であるから』

と仰せられる。そこで自分はその使とともに、大橋を渡って、だんだんと何とも知れぬ、焦つくよつな熱い空を、笠も着ず進んで行った。すると俄にどういうわけか、空が真黒になって、雷鳴轟きわたり、雨は車軸を流すがごとく降ってきた。真昼にもかかわらず一寸先も見えぬ真黒闇になって、あまつさえ風ひどく一步も進むことができぬ。そのとき心に思うよう、……高天原から自分を迎いに来たというから、承知して一步踏みだすと此の有様である。或いはこの者がそういうて、自分に苦しみを与えるために連れて行くのではないか……という念が起ってきた。

そこでまた天然笛を取りだして吹奏した。すると雨はカラリと晴れ、雷鳴は止み、空は明らかになってきた。それから幾つも幾つも峠を縫ってすすむと、狭い道路にあたって、種々

の大蛇や毒蛇が横たわっているのに出会った。

盲目の使は大蛇も平気でその上をドンドン踏みわたって行く。また虻があっても狼が足元に噛みつきかかっても、平気で歩いていく。自分は眼が明いているために、大蛇や、毒蛇や、狼に眼がつき、恐怖心がおこって進むことを躊躇した。しかしながら盲目の使がするとおり踏んで行けば、別条はなかると思ひ、怖々踏んで行った。そのとき天の一方から誰いうとなく、

『眼の見えざる者は幸なり』

との声が聞えてきた。

それから一の峠の頂上に達して、兩人がそこで暫時休息した。そのとき心に思ったのは……実にこの小さな眼の見えるほど苦痛な、そして不幸なものはない。自分は眼が明いているために、大蛇や狼を防ごうとして、色々と心配をするが、盲目はなんとも思わず、平気で進んで行く。この小さな眼を開くことは要らぬことだ。世界のこと、眼を明けぬ方がよい。たとえ見えても見えぬ方の方が、無難である……と覚ることを得た。

すると盲目の使は、諄々と地の高天原における種々の様子を話してくれた。かつて自分の経ってきた幽界や、いまだ探険をせぬ神界の話もした。そこで、

『貴殿はどうしてこんなに詳しいことが解るか』

とたずねた。

『あなたをお迎えに来て、お目にかかった時、あなたから光が現われて、今まで解らなかつたのが、幽界の方は何もかも明瞭になって、非常に心が勇んできました』
と答えた。

そうしてその使の言うには

『実は大神の命により、あなたを迎えに来たのであるが、地の高天原は今悪魔が、種々と邪魔をして黒雲に包まれておるので、ひそかに隠れて来たような次第であります。そこで神様も単独では行かず、あなたに来てもらって、地の高天原を明らかにすべく御用してもらわねばならぬ。あなたも洵に御苦労なことです』

という。自分はこの山の峠まで引っぱり出されて、こういうことを聞かされたのである。前回の探険に懲りておるからと言って、今さら女々しく引還すこともならず、行けば大変な難に会うことは知れているが、氏神や、神界の命令であるから、どこまでも奉ぜなければならぬと思い、勇気を鼓して地の高天原へゆくことにした。

案の定、高天原の聖地に来てみると、自分の来ることを悪魔が先に知って、非常に狼狽し、反抗運動の真最中であつた。丁度自分は、火の燃えている中へ飛びこむ心地がした。

(大正一〇・一〇・一九 旧九・一九 広瀬義邦録)

瑞月

焦熱の地獄に落ちし現身うつそみも

神に復ればこゝろ涼しき

迫害と苦痛は常と覚悟して

世を教へ行く真人まひと尊き

世を救ふ弥勒の神の標章ひしるしは

に十字まじの神定めなる

約らなしと吾身を思ひ或る時は

偉大えらしと思ふ事もありけり

吾れ無くば神の御国を如何にせんと

胸いためけり夏の夕暮れ

無雨に泣き亦暴風や洪水に

苦しむ世人救へといのる